

## ゆらぎとしての提喩

Synecdoche as Fluctuation

梅本 孝

Takashi UMEMOTO

(平成17年9月14日受理)

本論では人間の感覚の中においてコミュニケーションの必要不可欠な要素として概念<sup>1</sup>の対象化のなかにゆらぎがあると仮定した。二人の人間がコミュニケーションを行っている際に、ある概念に関して語り合う場合において、常に当該の二人が全く同じ外延を頭において語っているわけではない。外延にずれが生じる場合もある。しかし、その場合においても実際にコミュニケーションに齟齬をきたすことは殆どない。これは外延の認識の中にゆらぎがあるためであると仮定した。詰り、ゆらぎはコミュニケーションにとって必要なものであると仮定した。ゆらぎとは言っても、言語使用の中ではどの概念とどの概念の間でゆらぎが生じるのか、そして、その2つ（或いはそれ以上の）概念の間で、どちらの概念の方がより普通に頭に上るものであるかが、慣習化する。そういった形で、ゆらぎが無標性と有標性を生む基盤となり、極端な形で顕在化し、慣習化したものが提喩であると考えた。提喩には大きく分けて2種類の提喩がある。類で種を表す提喩と種で類を表す提喩である。前者は類が無標で後者は種が無標であると規定できる。同時に前者の場合、類がいわゆるLangacker (1988) の言うベースで種がプロフィール、後者の場合は種がいわゆるベースで類がプロフィールとなることも考えた。この2種の提喩の中での比較では種で類を表すタイプが無標であると仮定した。それは幼児の言語習得の初期の段階において、過剰拡張 (overextension) の方が過剰縮小 (underextension) よりも無標であると想定できるからである。

最後に指摘しなければならないことは、たとえ、どれだけ慣習化の程度が上がっても、ありとあらゆる概念が常にゆらぐ可能性があるということと、それに伴って、全ての概念が提喩と言われることばの綾を経験する可能性を常に有しているということである。

### 1. はじめに

ゆらぎは元々は電氣的導体に電流を流すとその抵抗値が一定ではなく、不安定にゆらいでいることが70年ほど前に発見されたことによるという(ゆらぎ研究所, 2000)。ゆらぎ研究所によると、そのパワースペクトルが周波数 $f$ に反比例することから「 $1/f$ ゆらぎ」と名付けられた。同研究所によると、ろうそくの炎、そよ風、小川のせせらぎ、小鳥のさえずりなどの様々な自然現象、及び人の心拍の間隔、クラシック音楽、手作りの作品の中に「 $1/f$ ゆらぎ」が発見された。このゆらぎは自然界の中で人類が長期に亘って接してきたゆれで

<sup>1</sup> 本論においては概念ということばを用いる際は、特に断らない場合は外延を指すこととする。

あるので、人間の認識そのものに影響を与えている可能性は否定できない。本論では人間の認知はゆらぎがある状態が普通で、ゆらぎがない状態はどちらかという、寧ろ異常な状態であると仮定する。

そもそも生きている限りは、私達自身が常に動いており、しかも、眼球も動いているということを考えれば、視覚の部分に於ては、常にゆらぎが生じている可能性がある（内田1990：78，相場2002，Cf. 相場2001）。

同じ母語を話す二人の人間がコミュニケーションを行う場合、知識体系が違うのにも拘らず、大抵の場合、コミュニケーションは成立する。言語外の文脈、言語内の文脈が意思の疎通を助けている面が強いであろう。それに加えて、認知のゆらぎを許容する機構が人間に備わっていることが意思の疎通を手助けしている面も想定できる。

本論では、認知のゆらぎが定式化したものの一部が提喩という考え方を採用した。提喩についてはいろいろな議論があるが、ここでは佐藤(1992：189ff.)の提喩の考え方を採用することにする。佐藤によると、提喩には2種類ある。一つは(1)類によって種を表す提喩であり、もう一つは(2)種によって類を表す提喩である。この場合、(1)は大きなカテゴリーがベースで小さなカテゴリーがプロフィールに当ると考え、(2)の場合は小さなカテゴリーがベースで大きなカテゴリーがプロフィールであると考えた。

こどもは言語習得の初期の段階において、過剰拡張(overextension)と過剰縮小(underextension)を行うことが知られている。本論では過剰拡張が種から類への提喩で、過剰縮小が類から種への提喩であると仮定した。しかし、子供は少ない語彙で様々なことを表現しようとするので、そういった意味では、基本的には過剰拡張が過剰縮小よりも無標の形である可能性がある。これをそのまま提喩に当てはめれば、類を用いて種を表す提喩よりも種を用いて類を表す提喩の方が無標である可能性がある。

## 2. ゆらぎと視覚について

この世の中に存在する生あるものは殆ど、動いていて、それを知覚する私達自身も眼球も動いている。そういった意味では、目に映るものはゆらいでいても可笑しくはない。しかし、物体はゆらぎを持つことがないように見える。これは人間の側にそれを調節する機構が備わっていると考えすることはできないだろうか。相場覚(2001)によると、心理学の世界に於て知られている現象に運動残効がある。例えば、滝のように、常に上から下へと落ちる水をしばらく見た後で、止まっているものを見ると、水の流れとは逆に上の方向に移動するように見える。或は、うずまき残像と呼ばれるような、拡張する方向の渦巻きをしばらく眺めると、それが、停止した時には、逆向きの、縮小する渦巻きが現れる、という現象である。詰り、実際に運動しているものの方向とは逆の方向にもものが見えてしまうという現象である。これは、脳内での活動がゆらぎ、人間の知覚のゆらぎもこの脳の働きに影響されている可能性がある。言わば、ある方向に意識が過剰に向かうと、自然と、それを矯正しようとする働きが生じてしまうと考えることができる。これを提喩に当てはめると、以下のことが言える可能性がある。あまりにも本来よりも大きなカテゴリーを提示すればそれよりも小さなカテゴリーだと、知覚してしまいがちになる。逆に、本来よりも余りにも小さなカテゴリーを提示すれば、それよりも大きなカテゴリーであると知覚しよ

うとする、ということが言える。次の第3セクションでは具体的な提喩の分析を行う。

### 3. 具体的な提の分析

#### 3.1 類を用いて種を表す提喩

提喩は認知のゆらぎであると仮定しているが、ゆらぎの範囲というものが存在すると想定できる。言わば、心地のよい範囲のゆらぎの中での外延のゆれは慣用的な提喩になりがちであり、慣用度が増すに従って、提喩という意識すらなくなってくる。その範囲を逸脱すればする程、文体的、文学的効果が顕れがちになり、ある種のことばの綾がはっきりと聞いていることが分かる。

本論では提喩は佐藤(1992)に従い、2種類に限定した。一つ目は類を用いて種を表す提喩である。以下に具体例を挙げる。この場合は大抵の場合は類を提示することによって、遠まわしに、間接的に、種に言及するという形になる。提喩として確立度が非常に高い場合は、種への言及が間接的にではあっても、一度、類が提示されれば、文脈が特定できなくとも、その類がどの種に言及されているか迷うことは少い。このタイプの提喩は幼児の言語の中では分化、詰りセクション5の中では過剰縮小を表しており、3.2の種を用いて類を表す提喩とくらべると、より有標の提喩であると考えることができる。より有標な分だけ、ことばとしての綾、例えば婉曲の気持ち、が出やすくなる可能性がある(Cf. 森2003: 324)。以下に例を挙げる。

- (1) 極刑→死刑<sup>2</sup>
- (2) 風俗→性産業
- (3) 薬→薬物
- (4) 飲み→アルコール飲料を飲むこと
- (5) creature→man
- (6) おめでた→妊娠
- (7) 天気→晴れ
- (8) 虫→昆虫
- (9) 御三家→尾張徳川家、紀伊徳川家、常陸徳川家など
- (10) 文法→統語論
- (11) 植物に対峙する動物→人間に対峙する動物

臨時性の強い例もここで挙げる。

- (12) (首相による) 重大な決意→衆議院の解散

(1)の極刑は既に辞書(『言泉第一版(1986)』、『広辞苑第五版(1998)』など)にも記載されている意味として「死刑」とあり、提喩としての慣用度が高い。一方、(2)の風俗は上掲の

---

<sup>2</sup> これは「極刑」で「死刑」を表す場合である。以下の例も全て同じ。

辞書類には性産業との記述がなく、提喩としての確定度は(1)よりは落ちる。

### 3.2 種を用いて類を表す提喩

この場合は類の方から見れば、種が類の中の代表例という関係が成立することが多い。幼児の言語で言えば般化、詰り、セクション5の過剰拡張に当たる。佐藤(1992:211)にも示唆されているが、こちらの提喩のタイプの方が、より普通の、自然な提喩、無標の提喩であると仮定できる。幼児言語の中では過剰拡張がこの提喩にあたると考えられる。幼児言語の中で、過剰縮小よりも過剰拡張が基本であることを示唆するものとして、岡本(1980:185-195;1982:136ff.), 内田(ed.)1990:94ff.), 村田(1968:169), 村井(1980:144-151)がある。逆に、過剰縮小の基本性を示唆しているものとして、今井(2000:153), 山内(ed.) (2002:101)がある。以下に幾つか例を挙げる。

- (13) 魚→タイ (関西)
- (14) 魚→マグロ (関東)
- (15) 花→桜 (花見と言う場合の「花」)
- (16) (お茶しようと言う時の) お茶→ノンアルコール飲料全般
- (17) 金→富
- (18) 小野小町→美人
- (19) 家康→大人物
- (20) ご飯→食事
- (21) bread→food (「人はパンのみによって生きるものに非ず、という場合の『パン』」)
- (22) 緑→植物
- (23) ごきぶりホイホイ→ごきぶりホイホイに似た製品群
- (24) Kleenex→ティッシュペーパー
- (25) 人間に対峙する動物→植物に対峙する動物

## 4. 広義と狭義の問題

森羅万象の分野において、広義と狭義と言うものがある。所謂、広い意味と狭い意味である。一般に学問に於ては定義付けは出来るだけ厳密に行った方が良いという理解がある。それにも拘らず、どうしても広義と狭義が発生してしまうということは、人間の認知の側に、その二つの定義の発生を後押しする装置が存在していると結論せざるを得ない。その装置が2種類の提喩を生み出す装置と同じものである可能性がある。又、タクソノミーに於いてもここで述べた広義と狭義の問題と平行した問題が生じる。例えば、動物といった語は、生物を上位後として、植物と対立している状態の動物1と動物1を上位語として人間と対立している状態の動物2を想定することができる。動物1は人間を含み、動物2は人間を含まないということになる。図1と図2を参照。詰り、広義と狭義の問題はタクソノミーとの関連で考察することが可能で、より根源的には提喩の種と類に収斂することができる。

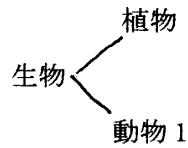


図 1

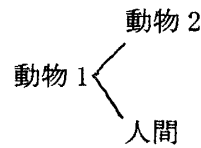


図 2

## 5. こどもの言語習得とゆらぎ

こどもは語義の発達の段階に於て、新しい語を獲得していく過程の中で、同じ語を使用しているにもかかわらず、その使い方に於て、大人が使用する語の意味とは違った意味を語に付与することがある。こうした現象の一つとして、大人の標準的用法から拡張された外延に対して、ある語を使用することがある。これが幼児による過剰拡張である。逆に、大人の標準的な用法から縮小した外延に対して、ある語を使用することがある。これが幼児による過剰縮小である(村井1980:144-151, 山内(ed.) 2002:101, 小林晴美・佐々木正人(ed.) 1997, 1998<sup>4</sup>:89, 入谷敏男1964:196-197, 内田(ed.) 1990:94ff., 前田・前田1983)。

Rescorla (1980) は幼児の過剰拡張には以下の3種類があるとしている。それぞれの拡張の種類の後のパーセントはRescorlaの実験の結果である。

- (A) Categorical overinclusions (55%) (a. 性の拡張(お母さんに対してDadaと呼ぶ場合)。 b. 年齢の拡張(子供に対してbabyを使用する場合。 c. 家族語の拡張(成人男性一般に対して、Dadaという単語を使う場合など)。
- (B) Analogical overextensions (19%) (ムカデをcombと言うような場合)。
- (C) Predicate statements (25%) (いつもは人形がおいてあるのに、たまたま人形が置いていない場所のことをdollと言うような場合)。

この内、本論に於て直接関係するのは(A)のcategorical overinclusionsである。3つの過剰拡張の内一番頻度が多いのもcategorical overinclusionsである。これは提喩として考えれば、種を用いて類を表す提喩となる。

幼児はcategorical overinclusionsを行うだけでなく、逆に過剰縮小も行う。過剰縮小の場合は、提喩として考えれば、類を用いて種を表す提喩となる。人間がことばを用いる最初期に於て、既に提喩を用いているということは、提喩が如何に人間の認識の中で深く根ざしているのかという傍証になる。

## 6. 体性感覚受容野と視覚受容野

入来(2000)に於て、ニホンザルの道具使用に於ける脳内機構が研究されている。体性感覚受容野は二つの方向のニューロンの活動を記録することによって決定されている。体性感覚受容野は「軽い触刺激や圧迫、関節の受動的屈伸、腕/手/指の能動的運動に対する反応特性によって同定した(入来2000:196)」もので、視覚受容野は「空間走査用の視覚刺激プローブがそのニューロンの発火を密に引き起こす空間の範囲と定義した(入来2000:196)」。体性感覚受容野は図3aの陰影部、視覚受容野は図3bの陰影部である(入来2000:196)

を改訂)。

これによると体性感覚受容野は原則として視覚受容野に含まれることになる。脳のある領域(頭頂葉後方下部領域近傍)は複数の感覚が統合されることが分かっている領域で、この領域に於て体性感覚情報と空間視情報とが統合されることが分かっている。これは、人間の体の一部、例えば掌は純粋な掌そのものの大きさと一緒に、掌の周りの空間も掌の一部と認識をしているということを示唆している。とすれば、人間の認識一般のゆれとも関連してくる可能性がある。

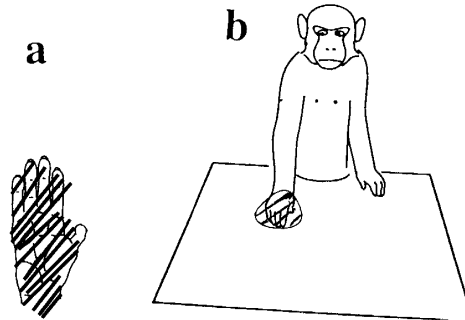


図 3

## 7. 結論

以上の議論より、本論では以下の点を蓋然性の高い結論として主張する。

1. 提喩は人間の認知のゆらぎが顕現したものである。
2. 人間の認知のゆらぎは幼児のことばの中では過剰拡張 (overextension) と過剰縮小 (underextension) という形で立ち現れる。
3. 厳密な学問上の定義を行う際にも、このゆらぎから完全に逃れることは出来ず、広義の定義と狭義の定義という形式でゆらぎが顕現する。

## 参考文献

- 相場覚 (2001) 『知覚心理学』「第 5 回 視覚(3)運動視」放送大学. NHK.  
 …… (2002) 『心理学初歩』「第 3 回 基本的意識過程(2)」放送大学. NHK.  
 今井むつみ (2000) (ed.) 『心の生得性：言語・概念構造に生得的制約は必要か』. 共立出版.  
 入来篤史 (2000) 「ニホンザル道具使用の脳内機構：シンボル操作の起源に挑む」『認知科学』9月号. 195-201. 日本認知科学会.  
 入谷敏男 (1964) 『増補言語心理学：コミュニケーションの心理学的基礎』. 誠真書房.  
 小林晴美・佐々木正人 (ed.) (1997, 1998<sup>4</sup>) 『子どもたちの言語獲得』大修館書店.  
 Langacker, R. W. (1988) “A view of linguistic semantics”. In: Rudzka-Ostyn, B. (ed.) *Topics in cognitive linguistics*. Amsterdam: John Benjamins.

- 前田富祺・前田紀美子 (1983) 『幼児の語彙発達の研究』. 武蔵野書院.
- 森雄一 (2003) 「隠喩・換喩・提喩の関係をめぐって」. 『日本認知言語学会論文集』第3巻, 322-325. JCLA.
- 村井潤一 (1980) 『言語機能の形成と発達』風間書房.
- 村田孝次 (1968) 『幼児の言語発達』培風館.
- 岡本夏木 (1980) 「初期言語にみられる機能」. In: 園原太郎 (ed.) 『認知の発達』. 培風館, 185-195.
- ………… (1982) 『子どもとことば』. 岩波書店.
- Rescorla, L. A. (1980) “Overextension in Early Language Development”. *Journal of Child Language*, 7, 321-335. Cambridge University Press.
- 佐藤信夫 (1992) 『レトリック感覚』. 講談社.
- 内田伸子 (ed.) (1990) 『新児童心理学講座第6巻』. 金子書房.
- 山内光哉 (ed.) (2002) 『発達心理学上 (第2版)』. ナカニシヤ出版.
- ゆらぎ研究所 (2000) <http://home.ksp.or.jp/yuragi/>